

Nara Women's University

Bangladeshにおける女性労働の変化とエンパワーメント:マイクロファイナンス利用者へのインタビューから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学社会学教育研究会 公開日: 2018-03-28 キーワード (Ja): イスラム教, エンパワーメント, ジェンダー格差, バングラデシュ, マイクロファイナンス, 女性労働, 農村社会 キーワード (En): 作成者: 山岸,采加 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/4623

Bangladeshにおける女性労働の変化とエンパワーメント —マイクロファイナンス利用者へのインタビューから—

山岸 采加

1 問題関心

南アジアに位置する Bangladesh は、世界第8位（注1）の人口大国であり、最貧国の1つとして知られている。また、 Bangladesh 人口の約90%はイスラム教徒である。このような国でイスラム教の果たす役割は大きく、イスラム教及び閉鎖的な農村社会の習慣の影響から、 Bangladesh の女性は社会的に虐げられた地位におかれている（榎木2003）。 Bangladesh の女性は「パルダ（Pardah）」（注2）と呼ばれる規範により男性の目を避けて生活し（谷・田上2005）、早期に結婚する習慣がある。 Bangladesh の女性の仕事は、料理や家の維持や食べ物の収集、また農作業など多岐にわたるが、日本では無償労働と呼ばれるこれらの活動は家事の延長とみなされ、法的にも社会的にも労働として認知されていない（Moshreka Aditi Huq 2014）。

しかしこの30年間で、国内や国際的な組織、ビジネス界、教育、保健・医療、研究、行政や防衛等のホワイトカラーの仕事に就く女性が増加している。また1980年代の経済構造改革と産業化に伴う縫製工場の拡大で、縫製工場で働く女性の数も急増（注3）した（Moshreka Aditi Huq 2014）。いまや Bangladesh は、BRICs（注4）に次ぐ経済発展の可能性を秘めた「ネクスト11」（注5）に名を連ねるほどの経済成長を見せている。1980年代から90年代にかけて「開発の実験場」とさえ称された Bangladesh では、現在も政府主導の開発計画と並行して国内外の多数の民間機関、特に Bangladesh 国内のNGOが強いインパクトをもって開発をリードしている。アジア最大のNGOであるBRAC（Bangladesh Rural Advance Committee： Bangladesh 農村向上委員会）をはじめとする大規模NGOから、ひとつの村落を活動地域とする当事者型のNGOまで数多くのNGOがさまざまな活動を展開している（南出2014）。

中でも Bangladesh のNGO活動に大きな影響を与えたのが、1983年にムハマド・ユヌスにより提唱された、マイクロクレジットと呼ばれる貧困層向けの無担保小口融資制度である。このマイクロクレジットに貯蓄などの金融サービスの提供を含んだものをマイクロファイナンスという。明確な使い分けは困難であるため、本稿では以降マイクロファイナンスに表記を統一して進める。マイクロファイナンスは、非制度金融（注6）が農村金融の大部分を占めていた（注7） Bangladesh 農村において、「貧困層でも適正な条件の下で資金を得ることができれば、外部からの援助に頼ることなく貧困から脱却できる」というユヌスの仮説のもと、飢えや貧困問題の根本解決を目標に生み出された（日下部2013；ムハマド ユヌス2008）。マイクロファイナンスによる所得の向上や女性のエンパワーメン

ト(注8)に関しては、様々な論文でその効果が論証されている(萱野 2004; 鈴木 2010; Md. Almasur Rahman 2007; Nasir Uddin 2014)。またマイクロファイナンスは、その運営のためのスタッフ人件費等を貸付金の利子から捻出することが可能であり、団体として利益を上げることができる。そのためマイクロファイナンスはバングラデシュの NGO の間で爆発的に普及(注9)した(日下部 2013)。

一方で、マイクロファイナンスの問題点や課題も多く論じられている。その急速な普及により小さな村であっても、その多くには5つ以上のマイクロファイナンス機関のオフィスがあり、中には30以上の機関がサービスを提供している村も存在する(Asifur et al. 2010)。そして気軽にお金が借りられるようになったことで複数のマイクロファイナンス機関から借金をし、多重債務に陥る事例も存在する(日下部 2013; Md. Almasur Rahman 2007)。また、マイクロファイナンスは貸し付け側が利益を上げられる仕組みであるため、貸付団体側が組織維持や利益確保のため地域環境の特性を理解せずに無理に貸し付けを行ってしまい、結果返済が滞り貸し倒れるケースも多くみられた(日下部 2013)。これらに関してはその問題点や解決策を論じた先行研究がみられる。その一方で未だ具体的な議論がなされていない重大な問題点が存在する。それは、融資が「起業を通じた貧困削減」という目的とは異なる用途に使われているという問題である(日下部 2013; 萱野 2004)。つまり融資は本来、借り手である女性自身が融資を利用し事業を興すことを想定し貸し出しが行われていたが、その融資が実際には多様な用途に使われているというのである。マイクロファイナンスと女性のエンパワーメントについて、融資の活用による女性の経済活動への参加が自己雇用スキルや収入、意識の向上、活動範囲拡大に繋がり、そのようなエンパワーメントが、女性の家庭内での決定権や子どもへの意識に重要な影響を及ぼしているとする論が存在するが(鈴木 2010)、もし融資が女性の経済活動参加へと繋がっていないならば、このプロセスは成立しないこととなる。

マイクロファイナンスによる融資は実際どのように活用されており、どういったプロセスで女性の地位や意識に変化が起こっているのか。この疑問を明らかにするために、本稿では融資の活用法に焦点を置きながら鈴木(2010)の再検討と独自のインタビュー調査に基づいた考察を行う。2では鈴木(2010)の知見と問題点を整理した上で、提示されているデータを用いて再分析を行う。3ではバングラデシュの農村部において行ったインタビュー調査の結果を分析する。最後に再分析と調査分析に基づいた考察を行い、マイクロファイナンスによる女性のエンパワーメントの実態とそのプロセスを明らかにしたい。

2 先行研究の再分析

2.1 マイクロファイナンスは有償労働につながるか

鈴木はチッタゴン管区クミッラ県ダウドウカンディ郡 Gau ユニオン S 村(図1)におい

て、グラミン銀行の融資制度を利用する女性のいる11世帯、家族構成員総数68名に戸別訪問調査を行っている。調査にはグラミン銀行Gauユニオンのブランチ・マネージャーと同ブランチ所属の行員が同行し、また戸別訪問に際し近隣住民からの聞き取り調査も行っている。

鈴木の特長は、貧困女性を対象とする活動のなかで基本となるショミティ（注10）組織化の過程とショミティ・メンバーになってからの女性および家族関係の変化について現地調査を通して明らかにしたうえで、農村に居住する女性のエンパワーメントについて検証することである。検証のため、調査項目の中から以下7項目、①就学・識字、②融資額・活用の推移および職業や土地・家屋所有状況の変化、③家族構成員の生活状態、④メンバー間での情報交換、⑤子どもの就学・識字、子どもの労働に対する考え方、⑥夫（母子世帯の場合家族構成員）はなにを喜びとしているのか、⑦家庭内での決定権や生活状態の変化、のデータを取り上げて分析を行っている。

鈴木の見解は、マイクロファイナンス利用女性は、融資を活用し経済活動に参加することで徐々に自己雇用スキルや収入を向上させ活動範囲を拡大しており、それにより家庭内の地位向上や子どもの教育への意識向上が起こっているというものである。この裏付けとしては、融資による事実的变化と意識的变化の両面に関し、債務者以外の家族構成員にもインタビューを行うことで様々な視点からデータを集め説明している。また、近隣住民やメンバー同士の関係の重要性についても、ショミティ組織化の過程やメンバー間での情報交換の内容を詳細に調査し述べている。

しかし鈴木の研究では、考察に関わる重要な部分で、分析が欠けている点が存在する。鈴木は、11人の女性のうち7人が融資を通し有償労働に参加し始めたという結果から、融資の利用で女性の経済活動への参加が起こったと論じているが、この考察からは女性が行っているような労働を行っているのか、また融資のどの程度の割合のお金を自らの有償労働に使っているのかという点に対しては言及されていない。また、融資の活用法に関わる融資前後での夫の職業の変化に関しても分析されていない。これらの、融資が実際どのように活用されており、誰に変化を与えているのかという視点のもと、改めて女性のエンパワーメントに関する考察をする必要がある。鈴木（2010）で提示されているデータを用い、新たな視点を加えながら再分析を行う。

2.2 先行研究の再分析

再分析では鈴木（2010）の、融資の使用法や夫婦の職業、地位・意識の変化に関するデータを用いる。再分析項目は、①女性の融資活用法と職業の変化、②融資前後の夫の職業の変化、③夫は融資の何を喜びと感じているのか、④女性の家庭内での地位・決定権の変化、⑤女性の意識変化、である。

2.2.1 女性の融資の活用法と職業の変化

表1は鈴木(2010)の表を、債権者の女性とその夫の融資前後の職業と融資の活用法についてまとめ直したものである。

融資利用前の女性の職業は、**Struggling Member**(注11)である事例8の女性を除き、全ての女性において家事労働のみであった。融資後も、11人中3人は有償労働に参加していない。残りの7人の女性は、融資を利用しながら有償労働を始めている。融資後に彼女らが始めたビジネスの種類には、農作業、牛の飼育・ミルクの販売、野菜の栽培・販売、家禽飼育、養殖、ジュートの皮むき、ジュートの袋の仕入れ販売等がみられる。それらは家庭の敷地内で可能な仕事であり、バングラデシュの男性が「バングラデシュの女性自身でできる仕事」とみなしている仕事(3 インタビュー調査の章を参照)である。つまり、女性の経済活動への参加には、意識や文化的背景からくる制約がかかっているのではないかと考えられる。こういった有償労働への参加が、どの程度女性の自己雇用スキルや意識の向上、活動範囲の拡大をもたらしているかは、議論の余地があるだろう。

また融資の活用法に関しては、鈴木のデータではビジネスを行っている女性は、受けた融資の一部を自分のビジネスのために利用している事例が多い。しかし受けた融資全てを自分のビジネスのみに利用している例はみられず、その他様々な用途にも融資を活用している。中でも多い活用法が、融資を夫のビジネス資金とする用法である。夫が亡くなっている事例8の世帯を除く10世帯のうち、9世帯が融資の一部を夫のビジネスのために活用している。その他家屋の建設や子どもの教育費、さらには年金など、家庭内でまとまったお金が必要なあらゆる用途に、融資が活用されているといえる。融資を受けることで家計を支えるためのお金がまとまって得られるという認識が、融資を受ける家族の中に存在すると考えられる。

2.2.2 融資前後の夫の職業の変化

次に表1から融資前後の夫の職業の変化をみていく。事例8を除く10世帯の夫のうち、過半数の6人が融資前後で職業を変えており、残りの4人にも従来から行っていた事業を拡大するといった変化がみられる。職業を変えた6人のうち4人は前職が日雇い農業労働者であり、土地がなく雇われる立場であった状態から、融資を通し借地で農業を営んだり唐辛子卸売市場の貸し出し事業を行ったりと、自らビジネスを行うという経済面での向上がみられる。事例2のようにリキシャ引きから車両の運転技術を習得し、教習・実地の職を得た者もいる。このように融資前後の夫の職業の変化に注目すると、融資を受けた本人である妻以上に、その職業や社会的な立場に変化が起きているといえる。

2.2.3 夫は融資の何を喜びと感じているのか

上記で述べたように、妻が融資を受けることで夫に起こる変化は小さくない。そこで夫自身は、妻が融資を受けていることをどう感じているのか再分析し、後述する女性の家庭

内での地位の変化との関連をみる。

表2は「夫はなにを喜びとしているのか」に関するものである。これをみると、事例3、事例6のように「公正・公平な規則の下で融資を受けられる」ことや、事例2や事例5、事例9、事例10のように自分のビジネスの資金を融資により得られることへの喜びの声がほとんどである。逆に、妻が融資を受けることで妻が経済活動に参加するチャンスを得たことを称賛、後押しするような声はみられない。マイクロファイナンスにより家庭は公正に融資を受けることができ、そのお金で夫自らのビジネスを向上させたり、家族の生活を向上させたりすることが出来る点に、夫は喜びを感じているといえる。

2.2.4 女性の家庭内での地位・決定権の変化

マイクロファイナンスでは、女性の手を通して(注12)家庭に融資がもたらされるため、融資を受け家庭の生活を向上させようと思った際、女性の存在は不可欠となる。よって、マイクロファイナンス利用家庭では女性の地位に変化が起こっていると予測できる。鈴木は、バングラデシュ農村での家庭内での決定権は伝統的には男性側にあったのに対し、融資を受けている女性自身の決定機会や参加機会が増えていることは顕著であると述べている(鈴木 2010)。本稿ではマイクロファイナンスの利用により女性にどのような変化が起こっているのかだけでなく、それはマイクロファイナンス利用のどのような要素から起こっているのかを、データをもとに再考察したい。

表3は「家庭内での決定権や生活の変化」である。鈴木も述べていたように、「融資を通し女性の家庭内での決定権が高まった」という意見や、「夫妻で話し合う機会が増えた」という意見が多くみられる。このような変化の要因をみていくと、事例3の「融資を受ける前は生活が困窮していて問題が絶えなかった。生活が向上するなかで、家族全員でいろいろな話をするようになった」というように、生活の向上や収入への不安がなくなったことが、夫婦間で話し合いをもてる心理的余裕に繋がった可能性がある。事例5でも、融資を受ける以前は現金収入への不安が強かったものの融資を受け余裕が生まれ、夫婦で話し合う機会が増えているといった状況がみられる。また、融資を通し女性が知識や考える力を持ち始めていることも、話し合いが増えた一因と考えられる。「妻の決定権が高まった」ことの理由に関しては明確な記述はされていないが、事例3の「融資をもって来る妻の家庭内での立場は当然よくなっている」や、事例4の「私の手を通して融資がもたらされるのだから、私の家庭内での立場は当然向上している」といった記述から、女性が融資をもたらす存在であることが、家庭内での女性の決定権向上をもたらしている可能性がある。

2.2.5 女性の意識変化

マイクロファイナンスを通した女性の意識面における変化について、特にここでは鈴木による⑤子どもの就学・識字・労働に対する考え方のデータを中心に、変化内容とその要因を考察したい。

表4は子どもの就学・識字・労働に対する考え方について、鈴木の調査結果をまとめたものである。全体として、子どもの就学への意識は非常に高いといえる。事例8を除く全ての事例の女性が子どもたちを就学させており、その最終学歴は、少なくとも初等教育修了、最高学歴は事例4の次男、及び長女のHSC（High School Certificate; 高等教育修了証）となっている。教育への意識向上の要因に関して事例2の女性は、「融資を受ける以前は家屋もなく、食費を捻出することも大変だったので、教育のことにまで考えが及ばなかった。ショミティ活動を通して、子どもの教育への関心や私自身の意識が高まった」と述べており、その要因を、融資による経済的余裕とショミティでの活動にあると考えている。事例4の女性も、経済的困窮状態であった融資前と比べ今では、教育へ熱心になったと述べている。融資を受ける以前から教育の重要性を理解していたにもかかわらず十分に教育を受けさせられなかった女性を含めほとんどの女性が、教育への意識向上だけでなく実際に以前より教育を受けさせるようになってきている。

教育面以外での意識の変化に関しては直接的なデータはないが、メンバー間の情報交換（表5）の内容でダウリー（注13）に関することや生活の向上法、清潔さに関してメンバー間で話していることが窺えるため、そのような点に関してもショミティの形成により意識の変化が起きている可能性がある。

2.3 再分析による考察

鈴木の見解は、女性はマイクロファイナンスの利用を通し、融資を活用し経済活動に参加することで自己雇用スキルや収入を向上させ活動範囲を拡大し、それにより女性の家庭内での地位向上や子どもの教育への意識向上が起こっているというものであった。

しかし鈴木の提示したデータを子細に検討した結果、マイクロファイナンスの利用による女性のエンパワーメントには女性の経済活動への参加は関連がないことが明らかになった。融資を受けても経済活動に参加しない女性も複数みられ、それらの女性達も家庭内での地位向上が起こっており教育への意識も高かったことが、大きな裏付けとなる。また鈴木の実例では、マイクロファイナンスの利用を通し経済活動を行うようになった女性も一定数みられたが、彼女らのビジネスの種類は非常に限定的であった。この結果から女性の労働の種類には意識や文化的な背景から来る制約がかかっている可能性がある。融資の使用法に関しては、その一部を債務者である女性自身のビジネスに活用している事例も多くみられたが、それと同程度もしくはそれ以上に、夫のビジネス資金として活用していた。また、その他家庭でまとまったお金が必要な際にも融資が利用されているようであった。融資を受け、多くの世帯で夫の職業が妻の職業以上に大きく変化している事例がみられることから、マイクロファイナンスが夫の働きやすさや家庭の経済状態の向上に貢献している可能性が考えられる。

夫は、妻の存在が家庭に融資をもたらし、家庭の生活向上や夫自身のビジネスに貢献し

てくれているという意識を持つようになり、そのような意識変化が女性の家庭内での地位向上をもたらしたのではないかと考えられる。女性自身の意識の変化に関しては、融資の利用によって生活が向上し精神的・経済的余裕が生まれたこと、またショミティへの所属によってメンバーと情報交換をする機会が生まれたことで、子どもの教育への意識を中心に向上したと予想できる。

次に、独自のインタビューにより得られたデータに基づいてさらなる分析を行う。

3 インタビュー調査

3.1 概要

我々は2015年9月、バングラデシュダッカ管轄区マダリプール郡ラジョール地区で現地調査を行った(注14)(図1)(図2)。現地NGOであるGUP(Gono Unnayan Prochesta)の調査協力のもと、GUPのマイクロファイナンスプログラムであるCooperative and Credit Program(CCP)(注15)を利用している女性2名、及び同プログラムの利用者が週1度グループ全員で集まり行っているグループミーティングに訪問し調査を行った。なお、個別インタビューを行った女性2名の村と、グループミーティングのインタビューで訪れた村は別の村である。筆者が英語、現地の調査対象者がベンガル語で話すこととなるため、インタビューはGUPのスタッフ数名が同行し通訳や解説に入る形で行われた。よって通訳段階での情報伝達ミスや、当事者が通訳を行うことにより情報に主観的な解釈が入り込んでいる可能性を含む。

個別インタビュー調査はラジョール地T村で行った。同村の人口は約4000人で、そのうち住民女性の約40~50%がマイクロファイナンスを利用している。インタビュー対象者は20歳(自称)でグループリーダーの女性Aさん、及びAさんと同じグループに所属する25歳の女性Bさんである。グループミーティングの訪問調査は、ラジョール地区U地域で行った(注16)。インタビュー対象者は、U地域のグループメンバー25名(ミーティング出席率100%であった)と、グループの統括を行っているGUPの男性フィールドオフィサー1名の計26名。ここでグループミーティングとは、マイクロファイナンス利用者が週1回グループごとに集まり開いている、ウィークリーミーティングのことを指す。

なお今回、バングラデシュ女性の置かれている労働状況をより深く理解するため、首都ダッカでNGOの経営アシスタントスタッフとして働く女性Cさんにもインタビューを行った。そこで、Aさん・Bさんのインタビュー調査結果を述べていく中で、時に応じCさんによる情報を加えて考察していきたい。CさんはHSC(High School Certificate;高等教育修了証)を取得後5年間の大学教育を受け、その後およそ4つの職業(注17)を経験している。

調査及び分析において、融資の事実上の利用者と利用方法、及び融資前後の妻と夫の職

業の変化に着目しながら、女性のエンパワーメントが起こっているのかどうか、及びそのプロセスをみていきたい。

3.2 マイクロファイナンス利用女性2名へのインタビュー調査

3.2.1 女性及び夫の職業と収入

表6はAさん・Bさんへのインタビュー内容をまとめたものである。Aさんはマイクロファイナンスによる資金を利用した小売店の店主と、知り合いの行うマイクロファイナンス事業であるムリ（注18）の店の手伝いという2つの仕事で収入を得ている。またAさんの夫は人を運ぶモーターサイクルの運転手の職に就いている。収入は2人合わせて1か月あたり60000タカ（注19）程度である。Aさんだけで1日500~600タカの利益がある。Bさんは、牛のミルクと農作物の販売を行っている。マイクロファイナンス利用前は主婦をしており、有償労働は行っていなかった。夫はダッカで建設関連の仕事をしている。Bさんは1日最低で800~1000タカ程度（経費を含む可能性あり）の稼ぎがある。

Aさん・Bさんの職業や収入に関して、従来のバングラデシュ農村の女性と比較をした。Cさんによると、従来村の女性は、それほど貧しくない女性であれば村に住みながら、一定の年齢に達すると結婚し、家族と暮らすというのが一般的であるという。村の女性は古い風習から、市場に物を売りに行くことが出来ないため、ハンドクラフトや家庭用品をつかって売ったり卵や野菜など家の生産物を売ったりするとしても、彼女らはそれを市場ではなく家で売る。このような状況下のため村では稼げて1日250タカ程度であるという。よって貧しい女性は、都市に行きお金を稼ぐことを選ぶ人が多い。というのも、都市や縫製工場で働けば1ヵ月あたり8000~10000タカ（週6日勤務として1日当たり300~385タカ程度）稼ぐことが出来るからだという。ここから収入に関しては、Aさん・Bさんは共に、都市で労働した場合に得られる収入を超える収入をより生活費のかからない農村で稼いでおり、マイクロファイナンスを通し上手に融資を利用し、生活を向上させているといえる。

活動範囲に関しては、基本的にAさん・Bさん共に自分たちの生活範囲の中で行っている様子であった。しかしBさんはミルクや農作物を市場で販売すると語っており、この市場での販売にBさん自身が行っている場合、その活動範囲は広がったといえるだろう。ビジネスの内容に関しても注目したい。Bさんのビジネスは牛の飼育やミルク、農作物の販売といった内容であり、これは鈴木（2010）の調査でも多くみられた、「女性でも可能な仕事」としてみなされているビジネスである。Aさんは小売店の店主という今までみられなかったビジネスを行っておりこの点からは労働の種類のがらぎが窺えるが、小売店はコミュニティ内に位置していて、活動範囲の広がりには制限があるように感じた。

収入の使用法について、Aさんは衣服や自分の化粧品、子どもの教育費や住環境の整備、ローンの返済など、家庭への出費を中心に一部は自分のために充てるなどし、幅広い目的

に使用している。Bさんは生活費や衣服、ローンの返済の他、一部を農業に使用するなど、自分のビジネスにも充てていることが分かる。2者共に、稼いだお金を自分の娯楽費として使用するのではなく、基本的には家庭の収入向上のためにお金を稼いでいるといえる。

3.2.2 融資の使用法

Aさんは前回40000タカの融資を受け、それを夫のモーターバイクの購入に使った。また、時によっては自分の小売店のビジネスのために、冷蔵庫やTV、食料品の購入をローンで行っており、融資を夫のビジネスと自分のビジネスのために使用しているといえる。Bさんはこれまで5回融資を受け、そのお金を牛の購入と農業への投資に使用しており、融資のお金を全て、自分のビジネスへ投資している。AさんとBさんの事例ではマイクロファイナンスによる融資を、自分のビジネスや夫のビジネスに投資していることが分かる。この2人の事例では先ほどの鈴木（2010）の事例と異なり、融資を子どもの教育費や年金制度といったビジネス以外の用途で活用してはいなかった。

3.2.3 マイクロファイナンスへ参加したきっかけ

Aさんは近所の女性がマイクロファイナンスを利用しお金を得る姿を見て、参加に至った。Bさんは母がマイクロファイナンスを利用していたため、母の退職後に利用を始めている。2人に共通するのは、身近な女性がマイクロファイナンスを利用しお金を得ていたことからその存在を知り、参加に至ったという点である。

鈴木（2010）のデータでも、11世帯の女性のマイクロファイナンス参加へのきっかけが調査されていたが、ほぼ全員が近隣の女性や親族の勧誘、もしくは親族と誘い合わせ融資を受け始めており、マイクロファイナンスの普及はこのような周囲との繋がりから起こり、それによってここまで広く普及しているのだと考えられる。

3.2.4 子供の教育への意識

マイクロファイナンス利用者の教育への意識の程度を知るため、「子供にどの程度教育を受けさせたいか」という質問を行った。Aさんは娘に「医者になってほしい」と述べていた。Bさんは、「娘はSSC（Secondary School Certificate：中等教育修了証）レベルであるクラス10（日本の中学卒）まで、息子は最低で12クラス（日本の高校卒）まで受けさせたい」と述べた。Aさん、Bさん共に子供への教育希望を一定以上持っており、教育の重要性を感じているようであった。また、この質問をした際はAさんBさん共に、笑顔で少し照れながら質問に答える様子がとても印象的であり、子どもの将来に希望を持っているように感じられた。ただしBさんが娘よりも息子に対し高い教育希望を持っていることから、教育やキャリアという点に関しては、男女で求められる基準に違いがある可能性がある。

3.2.5 家庭内での立場や発言権

家庭内での地位の変化に関しては、お金の使い方への決定権を中心に質問を行った。Aさんに融資のお金の使い方はどのように決定しているか、との質問をしたところ、「夫と一緒に決めている」と答えた。Bさんも、高価なものを購入するときの決定権の所在を尋ねたところ、「夫と一緒に決める」と答えた。この2人のケースでは、お金の使い方という家計と関わる部分において、妻が一定の発言権を持つといえる。また、Bさんにマイクロファイナンス利用後の家庭内での地位の変化を尋ねたところ、「いくつかの点で地位が上がった」と答えており、具体的には、「家庭で何か決断が必要な時、家族全員がBさんを頼る」という。

3.3 マイクロファイナンス利用者のグループミーティングにおけるインタビュー調査

3.3.1 グループの構成について

マイクロファイナンス利用者は必ずショミティというグループに所属することとなり、GUPの制度では、グループは地域により決められる。グループは基本的に周辺エリアの20~25名で構成される。これはグループの特徴の1つである。今回訪問したグループは25名全て女性でムスリムであったが、GUPスタッフの話によると、市場に近く人々がビジネスに従事しているような地域では男性のグループも存在するという。また宗教に関しても、ムスリムとヒンドゥー教徒の人々が同じ地域に住んでいる場合、彼らは一緒にグループを構成する。また、同じグループ内に家族のメンバーが2,3人いることはないというのもグループを構成する特徴であるという。グループのリーダー1名と会計1名が、メンバーの中から選ばれるそうだが、リーダーと会計の選び方に関しては今回尋ねることが出来なかった。

3.3.2 ディスカッションのトピック

ミーティングでは、初めに貯金(次項参照)の回収・記録作業があり、その作業が終了すると毎回1つのトピックに関しディスカッションを行う。ディスカッションのトピックはグループメンバーが決める。1年間(52週)で少なくとも20~30のトピックを議論することが目標である。訪問日は『子供の教育について』というトピックでディスカッションを行っていた。その他清潔さや早期結婚について、ビジネスで収入を向上させる方法など、様々なテーマを議論している。GUPのフィールドオフィサーは、様々なディスカッションのトピックに対応できるようトレーニングされており、時にオフィスからトピックに関する情報が提供されることもあるという。実際のディスカッションの様子を見学することはできなかったため、どのようにディスカッションしメンバーがどの程度発言しているのかをみることはできなかった。しかし、以前ディスカッションのトピックとなっていたという『清潔さ』について、「清潔さとはどのような清潔さか」と尋ねたところメンバーから口々

に様々な返答が返ってきたため、ディスカッションは形式的なものとなっておらず、メンバーの意識向上に繋がっているのではないかと思われる。

3.3.3 monthly 貯金

GUP のマイクロファイナンスの貯金システムには2種類ある。1つは全てのメンバーが利用する、weekly 貯金である。weekly 貯金は毎週25-50タカを、weekly saving として貯金するものである。もう1つが monthly 貯金と呼ばれる、特別な制度である。monthly 貯金は収入によって可能な人のみが利用する貯金制度であり、毎月一定額を貯金することで10年後に比較的多額の利子がついてお金が返ってくるものである。monthly 貯金制度は GUP が政府から許可を受け行っており、この制度は銀行業とされている。この制度により、一般の国の長期積み立て制度を利用できなかった貧困層の人々が、長期積み立てを行えるようになった。訪問グループでは、20歳以上の8名の女性のみ monthly 貯金の制度を利用していた。weekly 貯金の通帳と monthly 貯金の通帳は色分けして識別されている。

3.3.4 monthly 貯金利用者の積立金の利用目的

上記の monthly 貯金利用者に、10年後に返ってくる多額のお金を何に利用する目的であるのか質問した。10年後102434タカ返ってくる女性は、「現在4歳の娘の結婚費用にお金を使う」という。また同様に10年後102434タカ返ってくる2人の娘を持つ女性も、「娘の結婚費用とする予定だ」と答えた。

バングラデシュ人女性の結婚事情に関しては、2点大きな問題がある。早期の結婚とダウリーの問題である。しかし女性たちは、準備しているのはダウリーではなく、あくまで結婚費用である、と答えた。結婚にこれほど多額のお金を準備する理由としては、最近持たれている、結婚への不安からだという。バングラデシュでは結婚する男性の学歴が相手の女性の学歴以上であることが望まれる。そのため「娘が大学の学位をとるならば、良い夫であることが必要」という。結婚する相手の学歴によって、新婦側が結婚にかけなければならないお金の額が変わってくる可能性がある。

3.3.5 融資の責任

GUP のマイクロファイナンス制度では、受けた融資の返済が不可能となった場合、返済の責任は最終的に家族が負うこととなる。特に monthly 貯金の場合、初めに1人での登録とペアでの登録を選択することが出来る。この場合、ペアで登録した場合は2人で責任を負うことになるが、1人を選択した場合も債務者が死亡した際に誰がお金を継ぐのかあらかじめ登録する必要がある。また貸付けの場合には、息子か夫が連帯して責任を負う。このように、最終的な責任は家族が負っているが、グループメンバー同士も責任を持っているという。時に、メンバー間でローンを返済するようプレッシャーをかけることもあるそうだ。グラミン銀行がマイクロファイナンスを導入した当時では、返済の責任を連帯して

負うために5人程度の少人数でグループが組まれていた。しかしGUPのマイクロファイナンスの制度では、1つのグループメンバーが20名以上、時に35名程度のこともある。このように大規模化したグループで、全員で全員の返済の責務を負うことは難しい。よって融資の責任自体は家族が持ち、グループメンバー間では情報交換や、時にプレッシャーによって生活向上や返済のための協力をする、といった関係性がつくられているようであった。GUPのような形のグループ形成は、責任の連帯というよりはむしろ情報交換やミーティングにおけるディスカッションを通じた意識の向上に効果があるのではないだろうか。

3.3.6 融資の使用法

訪問グループの中の6名の女性に、融資の使用法を尋ねた。すると6人全員が、融資を利用し自身でビジネスを行っているのではなく、受けた融資を夫のビジネスに利用していることが分かった。例えばある夫婦は、妻が19000タカの融資を受け、夫がジュートのビジネスを行っている。また、別の夫は、tum-tumと呼ばれる乗り物（エンジン付きのバンで人やモノを運ぶビジネスを行っており、妻は受けた融資で夫のtum-tumを購入している。鈴木（2010）の調査では、融資の一部を自分のビジネスに、一部を夫のビジネスに充てているという女性が多くみられたが、ここでは夫のビジネスに活用法が傾倒しており、グループや地域的により活用法に傾向がある可能性がある。

3.3.7 ビジネスの主体

女性が自分のビジネスを自分自身で経営しているケースは、訪問グループではほとんどなく、上記6人の女性のように夫がビジネスを行うケースが一般的であるようだった。NGOの男性スタッフはこの理由として、「このグループはムスリムのグループであり、ムスリムの女性は時として、路傍で行うビジネスやその他のビジネスに対しそれほど聡明でないため」であると説明した。確かに行商として売り歩きを行ったり、乗り物の運転手などの仕事を行ったりしている女性はあまり見られない。女性自身がお金を稼ぐ方法としては、融資を受け牛や家禽を購入、飼育するケースが存在する。このような牛や家禽の飼育、家庭エリアにおける野菜の栽培といった仕事は女性自身でできるため、このようなビジネスを行う女性はみられるという。鈴木（2010）の事例でビジネスを行っていた女性たちや個別インタビューを行ったBさんもまた、このケースに当てはまっていた。

3.3.8 マイクロファイナンスの利用による女性の地位や権利の変化

「マイクロファイナンスの利用により、家庭内や夫との関係性において地位の変化はあったか」という質問をしたところ、「妻が融資を受け、家族を向上させるためにビジネスに関わっているため、夫は時に妻を優先させるようになっている」といった声や、「家計の収入のために融資を受ける妻を、夫が尊敬している」という声が聞かれた。このように、妻が家族のために融資を受け家庭の収入向上に貢献している、ということが要因となり、妻の

地位上昇がみられる。

3.4 インタビュー調査による考察

現地でのインタビュー調査から、Aさん・Bさんは共に、融資の活用により自らの経済活動を成功させ収入を得て、家庭の生活を向上させていた。また融資の利用法に関しても、この2者に関しては比較的自分のビジネスに充てている。しかしグループミーティングで聞いた事例をみると、融資のほとんどが夫のビジネスに活用されており、女性自身がビジネスを行っている事例はほとんどみられなかった。また、女性が出来るビジネスには限りがある、といった男性側の意識も見えてきた。この女性のビジネスの制約は、Aさん・Bさんの行うビジネスにも当てはまっている。

家庭内での発言権や地位の変化に関しては、個別インタビューの事例においてもグループミーティングの事例においても、発言権や地位の向上がみられる。自分でビジネスを行っている前者の事例でも、ビジネスを行っていない後者の事例でも同様に女性の家庭内での地位向上がみられたという結果から、女性の家庭内での地位の向上には経済活動への参加の有無は関係していないといえる。むしろ女性の地位向上には、女性の融資が家庭の生活向上に貢献している、という点が強く影響しているようであった。

またグループの形成はマイクロファイナンス利用女性にとって、情報交換やディスカッションにより生活・意識を向上させる効果を持っていると考えられる。グループミーティングでは、知識を持ったNGOスタッフのもと様々なトピックを取り上げディスカッションが行われており、このディスカッションによる教育効果はあると考えられる。Aさん・Bさんの教育意識の高さも、グループメンバー間での情報交換やディスカッションに影響されているのではないだろうか。しかしBさんに関しては息子と娘で期待する教育レベルに違いがみられ、そのような教育や出世への期待にはまだ親の意識によるジェンダー差が生まれている可能性がある。本来グループが持っていた責任の連帯という機能は、人数が大規模化したグループでは薄れていると考えられる。またマイクロファイナンスの普及に関しては、近隣の人同士の繋がりを活かし、利用者が近隣の人を誘うことで利用者が拡大していると考えられる。

5 考察

先行研究データの再分析及び現地でのインタビュー調査の結果によれば、マイクロファイナンスの利用により、バングラデシュ女性の家庭内での地位や発言権の向上、意識の向上が起こったといえる。しかしその要因は、マイクロファイナンスが開始された際に想定されていた「融資による女性の経済活動への参加」とは異なっている。

妻の存在が家庭に融資をもたらし、家庭の経済状態の向上や夫のビジネスに貢献していることが、女性の家庭内での地位と発言権の向上をもたらした。またグループメンバー間での情報交換や議論が活発にあること、融資の利用による生活の向上で精神的・経済的に余裕が生まれたことが意識の向上をもたらした。したがって地位や意識の向上は、必ずしも経済活動への参加の有無によって規定されるとは限らない。調査した女性のほとんどで家庭での地位向上がみられたが、融資で経済活動を始めた女性はある程度限られている。また融資で自らビジネスを行っている女性も、そのビジネスの内容の多くが家畜や家禽の飼育・販売、農作物の栽培・販売などといった、バングラデシュにおいて「女性でも可能な仕事」とみなされている仕事であり、その職業選択の範囲は非常に限定的である。女性の労働に関しては、まだ文化的・意識的制約がかかっているといえる。労働面だけでなく、学歴希望や結婚の面でも意識的なジェンダー格差がみられる。したがってマイクロファイナンスを通し、バングラデシュの女性は地位や発言権、意識が向上し、エンパワーメントしたといえるが、男女双方の意識の中でまだ、「当然のもの」として違和感なくジェンダー格差が残っている。

現在マイクロファイナンスを通し、女性の意識に変化が起こっているのは事実であると言える。この意識の変化が今後進み、またこのような意識変化が女性の中でより広がっていくにつれ、今まで外的な要因からエンパワーしていた女性たちが次は女性自身から、自らの平等や権利の獲得に向け動き出すようになると考えられる。マイクロファイナンスは確かに、家庭の経済的向上や女性の地位向上の一助となっているが、その役割はそれだけではない。マイクロファイナンスは女性の意識変化のきっかけであり、今後そのような意識変化をより拡大させるための手段として、重要な役割を担っているといえる。

[注]

- 1 IMF-World Economic Outlook Databases。日本は第10位。
- 2 女性を隔離する宗教的・社会的慣習で、壁やカーテン、スクリーンで仕切りをする。女性がパルダに引っ込むと、家の外での女性の個人的、社会的、経済的活動は制限される。
- 3 縫製工場での労働については、女性の収入機会を生み、女性の生活や地位を一変させた面を持つが（藤田 2010）、工場内での昇進機会や賃金評価の面で女性への評価がなされにくいという現実がある（長田 2012）。
- 4 ブラジル、ロシア、インド、中国の4ヶ国。
- 5 ゴールドマン・サックス社が提唱している、BRICsに続き成長が期待できる新興国のグループの総称。ベトナム、韓国、インドネシア、フィリピン、バングラデシュ、パキスタン、イラン、エジプト、トルコ、ナイジェリア、メキシコの11か国。
- 6 非制度金融は貸金業者、友人・親戚からの借入のことを指す。これに対し、特殊銀行

である農村銀行、国営商業銀行、政府機関、協同組合、NGO、グラミン銀行からの借入を制度金融と呼ぶ (Md. Almasur Rahman 2007)。

- 7 マイクロファイナンス開始直後の 1987 年時点で、農村金融の 3 分の 2 程度が非制度金融であった。
- 8 本稿ではエンパワーメントの定義を、巴山・星 (2003) に基づき、「人々が他者との相互作用を通して、自ら最適な状況を主体的に選びとり、その成果に基づくさらなる力量を獲得していくプロセス」とする。
- 9 2013 年の時点で政府認可のもとマイクロファイナンスを実施する団体は 500 に上っている。
- 10 マイクロファイナンス利用者が形成する小グループのこと。その規模や構成の仕方はマイクロクレジット機関により異なっている。
- 11 グラミン銀行は、バングラデシュ社会の最底辺に置かれている物乞いの女性たちを対象に無利子で融資を貸し付け物乞いからの脱却を呼びかける、**Struggling Members** プログラムを行っており、今回取り上げる調査データの事例 8 の女性はその制度の利用者である。
- 12 市場の近くの、人々がビジネスに従事している地域などでは男性の融資利用者も存在する。
- 13 結婚持参金のこと。婚姻の際、通常新婦側が一定の婚資を新郎側に支払うもので、宗教を問わず南アジア地域全般に見られる慣行。新婦が持参したダウリーの額で婚家における新婦の将来が決まり、両家の格を上昇させる機会として考えられているため、非常に高額化し新婦側の負担を増大させている。バングラデシュでは 1980 年に「ダウリー禁止法」を制定したが、規制の効果は問題視されている (榎木 2003)。
- 14 本稿が基づく現地調査は、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター主催のバングラデシュ研修の中で行われたものである。この研修は、松岡悦子・奈良女子大学教授および水垣源太郎・奈良女子大学准教授の引率により、2015 年 9 月 6 日～9 月 15 日に首都 Dhaka (ダッカ) 及び Madaripur (マダリプール) 郡 Rajoir (ラジョール) 地区内の複数の村や地域で行われた。
- 15 CCP はプログラムの目標として、社会経済状況の向上と貧困の削減を掲げている。また同時に貧困削減に向け、仕事や収入の機会をつくることを目指している (GUP Annual Report 2013)。
- 16 グループミーティングの訪問調査では主に松岡教授、水垣准教授が英語で質問を行い、GUP 協力者がベンガル語に通訳して行われた。筆者はここでは記録係と日本語への翻訳を担当した。
- 17 教師・衣類のデザインをプリントする工場・スリジョニーバングラデシュ (NGO) におけるマイクロファイナンス部門の会計士・GUP (NGO) の経営アシスタントスタッフ (現職) の 4 つである。

- 18 ぼん菓子のような米の菓子。菓子としてだけでなく朝食にも食べられているという。
- 19 家計調査によれば2000年の平均月収は、全国で5842タカ、農村4816タカ、都市9878タカである。都市の階層区分は車の所有がミドルクラスとアッパークラスの区切りの目安となり（車を所有するならば月収最低40000タカ必要）、ミドルクラスの下限は月収3000タカ程度という。しかし貧困層は状況が異なり、縫製工場で働く女性の例では最低1500タカあればなんとか1人、1ヵ月生活できると語ったという（大橋・村山2003）。しかしバングラデシュのインフレ率は2005年から2015年まで高い数値を保っており、貨幣価値が大幅に変化している可能性があるため、単純比較はできない。

[文献]

- 榎木美樹, 2003. 「バングラデシュにおける女性及び子どもの現状」『経済学論集』42(5): 1-17.
- 藤田雅子, 2010. 「"最貧国"の最新事情⑬女性の経済的自立、縫製業と小企業」『厚生福祉』4-7.
- Gono Unnayan Prochesta, 2013. *Annual Report 2013*.
- Huq, Moshreka Aditi, 2014. "Four Decades of Bangladeshi Women: Their Struggle and Emancipation," 奈良女子大学アジアジェンダー文化学研究センター公開シンポジウム (2014年9月26日).
- IMF, 2015. *World Economic Outlook Databases*. <http://goo.gl/JueAYC> (2015年1月8日取得)
- 萱野智篤, 2004. 「バングラデシュ第二世代マイクロファイナンスの課題—ガバナンスの視点から—」『北星論集(経)』44(1): 67-80.
- 日下部尚徳, 2013. 「マイクロクレジットは社会を変えるのか—バングラデシュの農村からの一考察」『Field+』9: 16-17.
- 南出和余, 2014. 「ヴェールを脱いでみたけれど—バングラデシュ開発と経済発展の中の女性たち」『現代アジアの女性たち—グローバル化社会を生きる』新水社, 195-214.
- 長田華子, 2012. 「日系縫製企業の第二次移転先としてのバングラデシュ—国際資本移転のジェンダー分析—」『南アジア研究』24: 103-131.
- 大橋正明・村山真弓, 2003. 『バングラデシュを知るための60章』明石書店.
- Rahman, Asifur, Ashir Ahmed, 大杉卓三, 2010. 「バングラデシュにおける大規模マイクロファイナンス機関の事業拡大の課題と展望—グラミン銀行、ASA、BRACの事例より—」『九州大学アジア総合政策センター紀要』4: 85-93.
- Rahman, Md. Almasur, 2007. 「バングラデシュの農村金融の実態とマイクロクレジットの役割—ボグラ県ボイラ村とカシャハル村の調査を通じて—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』24: 144-130.
- 鈴木弥生, 2010. 「グラミン銀行による貧困女性の組織化とエンパワメント」『社会福祉学』

51(3): 44-63.

谷正和・田上健一, 2005. 「ジェンダー化された空間—バングラデシュ・デルタ地域の集落と住居に関する研究その5」『日本建築学会大会学術講演梗概集』53-54.

巴山玉蓮・星旦二, 2003. 「エンパワーメントに関する理論と論点」『総合都市研究』81: 5-18.

Uddin, Nasir, 2014. “Microfinance in Bangladesh: A Tool for Women Empowerment,” 奈良女子大学アジアジェンダー文化学研究中心公開シンポジウム (2014年9月26日).

ムハマド・ユヌス, 2008. 『貧困のない世界を創る—ソーシャル・ビジネスと新しい資本主義』早川書房.

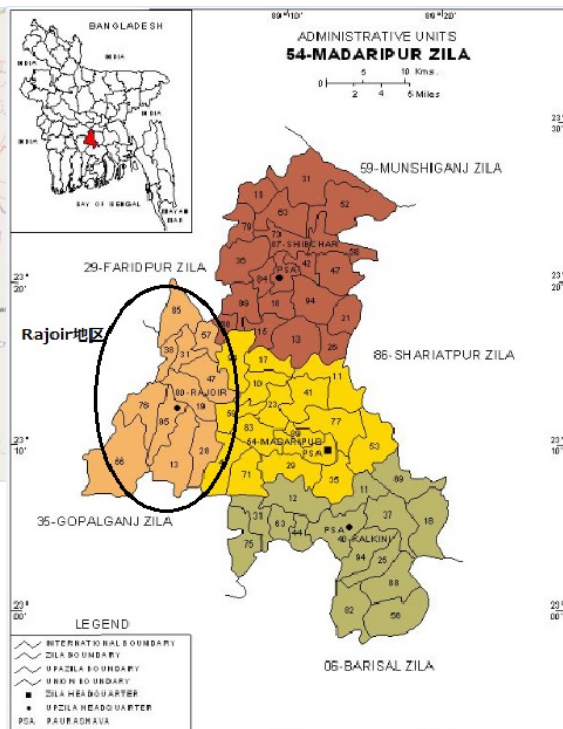
【謝辞】 本稿を執筆するにあたり、調査のコーディネーターや同行、通訳をしてくださった GUP の皆さま、インタビュー調査に快く応じてくださったバングラデシュ・ラジョール地区の皆さまに、深く感謝の意を表します。

図1 バングラデシュ調査地地図



鈴木 (2010) 調査地…クミッタ (Comilla)
 山岸・水垣調査地…マダリプール (Madaripur)
 郡ラジョール (Rajoir) 地区
 OpenStreetMap Japan より作成

図2 マダリプール郡ラジョール地区



* Bangladesh Bureau of Statistics, 2015, “BANGLADESH POPULATION AND HOUSING CENSUS 2011 Zila Report : MADARIPUR” p.xx より引用

表1 融資前後の女性と夫の職業と融資の活用法 (鈴木 2010)

		職業(融資前)	職業(融資後)	融資の活用法
1	本人	家事労働	家事労働 牛飼育 農作業手伝い	<ul style="list-style-type: none"> ・子牛購入 (イード祭で売り, これを資金に生活を構築) ・家屋建設 ・次男の海外出稼ぎ労働渡航費用の一部 ・屋敷地購入資金の一部
	夫	日雇い農業労働者	農業(借地) 牛飼育	
2	本人	家事労働	家事労働 野菜栽培(バリ) 家禽・牛飼育 牛乳販売(バリ)	<ul style="list-style-type: none"> ・家屋建設 ・家禽飼育と販売 ・トタン購入 ・乳牛の購入 (人工授精で子牛3頭誕生, 1頭販売, 2頭飼育) ・GPS(グラミン年金計画)
	夫	リキシャ引き(チッタゴン)	運転技術の教習・実地 車両運転技術習得 以後、運転技術の教習・実地 (車輛借用から、後に購入) 現在の受講料4000Tk	
3	本人	家事労働	家事労働 農作業 養殖 ジャガイモ販売 鶏ワケテン	<ul style="list-style-type: none"> ・借地(農地) ・農作業(自家消費) ・稲作 ・魚養殖 ・ジャガイモ販売 ・夫の海外出稼ぎ費用 ・ジャガイモ用の冷蔵庫借用 ・農地購入
	夫	農業・日雇い農業労働者	海外出稼ぎ労働(クウェート) 病院内清掃作業	
4	本人	家事労働	家事労働 野菜栽培と販売 ジュート皮むき ジュート袋の仕入れと販売	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものSSC試験 ・農地(借金の抵当)の取返し ・ヤギ・アヒル・鶏の購入 ・屋敷地(借金の抵当)の取返し ・ジャガイモ・米の仕入れ
	夫	農業・バザールで露店商		
5	本人	家事労働	家事労働	<ul style="list-style-type: none"> ・唐辛子卸売市場の転貸事業(共同事業)
	夫	農業・日雇い農業労働者	唐辛子卸売市場の貸し出し事業	
6	本人	家事労働	家事労働	<ul style="list-style-type: none"> ・兄弟から農地借用稲作(自家消費) ・とうもろこし栽培 ・米の仕入れ(販売用) ・ジュートの袋仕入れ(販売用) ・GPS
	夫	店開業(鶏), Gauバザール(労働者2人雇用)		
7	本人	家事労働	家事労働 牛飼育(バリで牛乳販売)	<ul style="list-style-type: none"> ・夫のビジネス資金 ・子牛購入 (人工授精で出産、販売)
	夫	日雇い農業労働者	野菜卸売り	
8	本人	物乞い レンガ運び	ピクルス行商	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクルスとアイスクリーム行商 ・毛布購入
	夫(他界)			
9	本人	家事労働	家事労働 家禽飼育と販売(バリ) 布靴の底縫製	<ul style="list-style-type: none"> ・夫のビジネス ・アヒル10羽, 鶏10羽
	夫	化粧品之行商	化粧品之行商(拡大)	
10	本人	家事労働	家事労働	<ul style="list-style-type: none"> ・夫の仕事(仕入れ拡大) ・長男のビジネス (家具製造と販売)の拡大
	夫	バザールに店開業	バザールで店(拡大)	
11	本人	家事労働	家事労働 家禽飼育	<ul style="list-style-type: none"> ・夫の店開業 ・家禽購入 ・ポンプ購入(貸し出し用) ・ポンプ設置, メンテナンス ・トラクター購入 ・トラクターのメンテナンス
	夫	灌漑用ポンプ貸し出し(後に売却) 河川で魚捕獲(プロジェクト)	八百屋店開業(季節の野菜) 農業 灌漑用ポンプ貸し出し	

* 鈴木 (2010: 47-51, 表1) に基づいて作成

表2 夫（母子世帯の場合家族構成員）はなにを喜びとしているのか（鈴木 2010）

事例	回答
1	「妻が融資を受けてから生活が向上したこと。最もたいへんな時期に妻がサポートしてくれた、現金収入がなかったころはいらいらしていたので問題が生じやすかった。家族全員が1日に3度の食事を摂取し、子どもたち4人（男児3人、女児1人）を全員就学させることができた」(夫による回答)。
2	「もちろん喜んでいる。グラミン銀行は女性にしか融資を貸し出さないのだから、夫たちは、融資を活用したければ妻に頭を下げなければならない。妻の気持ちを理解することが大切」(夫による回答)。
3	公平な規則の下で融資を受けられること、不誠実な高利貸しに頭を下げる必要がなくなった。それと同時に、賄賂も必要なくなった。
4	夫妻で相談しながら経済活動を行うことができた。家族のwell-beingが向上している。高利貸しによる借金から解放され、自由に生活することができるようになった。海外出稼ぎ中であった長男を除いて、子どもたち全員(3人)を就学させられた。そのうえ、二男と長女がHSC、二女がSSCを取得することができた。
5	融資を受ける以前は、農業および日雇いの農業労働者として現金収入を得ていた。融資を通して卸売市場で貸し出しを始めることができるようになった。元手となる現金を確保するためには、融資が不可欠であった。その後、少しずつ生活が向上してきた。
6	公正な規則の下で融資を受けられること。
7	妻が融資を受けられるようになってから生活が向上したこと。子どもたちの就学継続(教育費の捻出)について不安が減った。
8	家族で住める家屋を得ることができた。生活の向上(夫は他界)。
9	行商の資金が増えた。生活の向上。
10	バザールでの仕入額拡大。以前は現金を借りる立場であったが、いまでは困っている人に少額でも現金を貸し出ししたり、助けたりすることができる。生活の向上。
11	メンバーになった後の生活の向上すべてを家族全員が喜んでいる。夫妻の関係、家族の関係がとてよくなった。

* 鈴木 (2010: 58, 表 4) を一部改変の上引用

表3 家庭内での決定権や生活の変化（鈴木 2010）

事例	回答
1	「この村の女性たちは本当に強くなった。女性たちだけで話し合いをして出かけてしまう。いちいち夫に意見など聞かなくて自分たちで決めている。これに対して、私は妻によく相談するようになった。妻はいまではいろいろのことを理解していて、16年前と比較するとずいぶん頼りやすくなった。また、融資を受けるようになって生活が向上するなかで、2人のけんかはなくなった。夫妻のけんかは子どもがまねるのでよくないことだと考えている」(夫による回答)。
2	以前は知識がなかったのではじめだった。融資を受けるようになってから私自身も現金収入を得られるようになり、家族全員が1日に3回の食事を摂取できるようになった。家族の私への思い、対応も変化した。かつてこの村の女性たちは、あまりにも無知で無力だった。いまでは賢明になっている。また「子どもたちにできるだけ勉強させたい。二女を大学まで進学させたい」という私の意思を夫は理解している。
3	融資を受けるようになってから、一生懸命考えるようになった。私自身ものすごく勉強している。センター・リーダーになり、3か月に1回の研修(8~14時、昼食後~夕方まで)にも参加している。そこでは、子どもの教育、ダウリー、早婚、グラミン銀行の規則、融資返済方法について学んでいる。これらの知識をセンター・メンバーに伝えている。また、融資を受ける前は生活が困窮していて問題が絶えなかった。生活が向上するなかで、家族全員でいろいろな話をするようになった。そして、家族全体が穏やかになった。融資をもってくる妻の家庭内での立場は当然よくなっている。
4	私の手を通して融資がもたらされるのだから、私の家庭内での立場は当然向上している。融資を受ける以前はバリ中心の生活であった。融資を受け始めた1991年当時、女性が農作業を行うことに対して抵抗があったが、その年、義妹(C, 事例3)が懸命に農作業を行う姿勢に影響を受けた。いまでは、この農村の女性たちの活動範囲が広がっている。
5	夫妻で話し合う機会が増えた。いろいろなことを知ることができた。融資を受ける以前は、現金収入への不安が強かった。融資を受けられるようになってから「何とかなる」と考えられるようになった。
6	家庭内でなにかを決める際、私が意見をいったり、決定したりする機会はもちろん増えている。
7	融資を受ける以前は、家庭内の決定権は夫にあった。融資を受けるようになってから、2人で話し合う機会が増えた。いまでは、なにかを決めるときには2人で話し合っで決めている。夫妻の関係がよくなっている、子どもたちが安心して勉強に集中できるようになった。
8	物乞いから行商へ。
9	以前は、どんな少額な物でも夫の許可を得て購入しなければならなかった。たとえば、少量の香辛料を購入する際も夫の許可を得る必要があった。いまでは、私の考えで現金を使用することができる。そのため、子どもに必要な物を優先して購入したり、子どもの将来のために貯蓄したりすることができるようになった。娘たちを大学まで進学させたいと夫に主張できるようになった。
10	家庭内でなにかを決める際、私が決定する機会が以前よりも増えている。
11	家庭内でなにかを決める際、私が決定する機会が以前よりも増えている。

* 鈴木 (2010: 59, 表 5) を一部改変の上引用

表4 子どもの就学・識字、子どもの労働に対する考え方（鈴木 2010）

事例	回答
1	私自身がクラス2で就学を断念せざるを得なかった。そのことを残念に思っている。もっと就学を続けたかった。そのため、メンバーになる以前から、子どもたちは全員就学させたいと考えていた。しかし、メンバーになる以前、教育費捻出が困難だったので不安が付きなかった。融資を受けるようになってから、子どもたち全員を就学させられたことをうれしく思っている。
2	融資を受ける以前は家屋もなく、食費を捻出するのもたいへんだっただけで、教育のことにまで考えが及ばなかった。シヨミティ活動を通して、教育への関心や私自身の意識は変化した。だが、長女(クラス8修了)を14歳で結婚させてしまった。相手はとてよい人だけれど、娘の年齢を考えると悪いことをしてしまったという思いにかられる。16条の誓いにも反することをしてしまったと自分自身を責めることがある。ほか3人の子どもたちをもっと勉強させたい。物事を判断できるよい人間になってほしい。あるいは、海外出稼ぎ労働に就いて、より収入を得てほしい。二女は医師になりたいという希望をもっている。その実現のために頑張りたい。子どもの労働は反対する。
3	就学しなければ、子どもたちは視覚障がいようになってしまう。これからの時代は、男女とも権利は平等とわりわけ娘たち3人(2006年3月現在全員既婚)には「女性でも男性でも権利は一緒。男性だから、女性だからといわないで一生懸命やりなさい。男性に依存しなくても生きていけるようになりなさい」と何度も言って聞かせた。彼女たちは、司法、裁断も分かるようになり、二女は洋裁で現金収入を得ている。ただ、現在のような生活状態であれば、もっと教育を受けさせられたのにと残念に思っている。
4	83年ごろ、経済状態が困窮していたため、当時12～13歳だった長男を海外出稼ぎ労働(パキスタンへ)に就かせてしまった。このことは後悔してもしきれものではない。融資を受け始めてからは、子どもの教育に熱心になった。二男、長女には家庭教師をつけ、2人はHSCを取得、二女はSSCを取得することができた。子どもの教育はもちろんだ大切なこと。ただ、なかにはどうしても勉強したくないという子どももいる。そのような子どもにはなにか技術を身につけさせるべき、すぐに労働に出すのはよくない。まして、子どもをメイドに出すことも雇用することも絶対によくない。その子どもの人生を台無しにしてしまう。
5	メンバーになる以前から、男女を問わず子どもの就学は大切と考えていた。子どもたち4人のなかで、二女と長男はSSCを取得している。
6	子どもの労働は反対。子どもが就学することは当然大切なこと。
7	子どもたちの就学は、できるだけ継続させたい。そのために、夫妻で精いっぱい働き、できる限りのことをするつもり。長女は17歳でクラス9に在籍している。絶対に早婚させない。二男は12歳でクラス7に在籍している(順調に進級している)。
8	(Struggling Memberになる以前、貧困ゆえ、子どもたちを就学させられるような状況にはなかった)
9	融資を受けるようになってから、子どもの教育への関心が高まった。そのため、就学始期を過ぎていた二女を就学させた。とりわけ、これからは女兒の教育が大切だと認識するようになった。二女、三女は大学まで進学させたい。
10	子どもは就学させるべき。
11	当然のこととして、子どもは就学させるべき。

* 鈴木(2010: 57, 表3)を一部改変の上引用

表5 メンバー間での情報交換（鈴木 2010）

事例	回答
1	融資の活用方法、「どのようにしたら生活を向上させられるのか」という質問を受ける機会が多くある。その都度アドバイスしている。
2	融資の活用方法、「融資をどのように活用しているのか」と聞かれるので、具体的な活用状況について話をする。そして「あなたはどのように活用しているのか」と尋ねる。
3	「融資を受ける前と現在との違い、融資の活用状況、今後どのように生活を向上させたらよいか」と聞かれることが多い。また、センター・マネージャーへの交渉(融資の増額等)を依頼されることもあるので、その交渉を請け負っている。ただし「融資活用方法と生活の向上について、自分自身でもよく考えて欲しい」とメンバーに伝えている。
4	融資の活用方法。だれがどこでどのような活動をしているのか、どのようにしたら融資を有効に活用できるのか等をメンバーに伝える。新しくメンバーになる女性には「融資をどのように活用しようとしているのか。活用・返済ともにきちんと行わないと他のメンバーに迷惑をかけることになる。週1度のミーティングにも出席するように」と伝える。
5	子どもは学校に行かせるように。悪いことをしてはいけな。返済義務を怠らないように。返済未納は他のメンバーに迷惑をかける。
6	融資の有効な活用方法。融資は誰がどこでどのように活用しているのか。子どもの教育。家庭教師費用等。
7	融資の有効な活用方法。どのようにしたら生活を向上させられるか。
8	(回答なし: Struggling Member)
9	融資の活用方法子どもの教育。子どもを就学させているかどうか。トイレの状態。木を植えること。グラミン銀行の教育融資等。
10	「娘の結婚時にダウリー(持参金)を用意するのはやめましょう。息子の結婚時にダウリーを要求するのもやめましょう」。その他「家はきれいにしましょう」等。
11	「メンバーになってよかった」と確認し合っている。メンバーになってから少しずつ現金収入を得られるようになった。そのため、家族の生活が向上している。子どもたちにとってもよい学習の機会になっている。子どもの就学状況もよくなっている。

* 鈴木(2010: 56, 表2)を一部改変の上引用

表6 インタビュー調査概要

項目		Aさん	Bさん
基礎情報	年齢	20歳	25歳
	家族	夫(35歳) 娘(4.5歳) 兄弟:姉妹4人,兄弟2人	夫(33歳) 娘(8歳) 息子(5歳)
	就学歴	9年(△)	—
	識字	自分の名前はすらすら書ける。 アルファベットは書けるが単語の綴りはあまり知らない。	ベンガル語での自分の名前はすらすら書ける。 アルファベットは書けるが英単語は綴りが分からない様子。
	融資利用前の職業	—	主婦
職業について	融資利用後の職業	①小売店の店主 ②ムリのお店の手伝い	牛の飼育とミルク・農作物の販売
	仕事内容	①パンやお菓子,水,たばこ等日用品を小さなショップで販売。 商品は市場から仕入れる。 ②ムリの製造と販売。 最大週4-5日。	ミルクは1日50L販売。 販売農作物の種類は、ジュート・豆類・小麦・野菜等。
	夫の職業	モーターサイクルの運転手	建設関連(ダッカにて)
収入について	収入	夫と2人で平均月60000タカ。 Aさんのみで1日500-600タカの利益。	最小で1日800-900タカ(経費を含む可能性あり)。
	収入の使用法	住居の建設・服・化粧品・カッターや鉛筆の購入。娘の学校関連のお金として利用。	服の購入や食事,農業(種・肥料の購入),ローンの返済に使用。
融資について	融資の金額	前回は40000タカ	前回30000タカ
	融資の回数	6回	5回(8年間融資を利用している)
	融資の使用法	夫のモーターバイクの購入,自分の店のための食料品・冷蔵庫・TVの購入	3回は牛の購入 2回は農業(灌漑対策,種・肥料の購入)に投資
	参加のきっかけ	家の近くの女性がメンバーで,お金を借りるのを見て知った。	母がメンバーでありローンを借りていたため,母が引退後に参加した。
意識の変化	子どもの教育への意識	望みは,医者になってほしい。	娘はSSCレベル(クラス10)まで,息子はクラス12までは最低でも。
地位の変化	家庭内での地位	融資のお金の使い方は一緒に決めている。	高価な物の購入は一緒に決める。夫がダッカの時は電話で確認。家庭内での地位も向上し,何か家庭で決断が必要な時は全ての家族がBさんを頼る。

— …データが得られていないもの

△ …信憑性に欠ける情報

(やまぎし さいか)

[付記] 本稿は、奈良女子大学文学部人文社会学科社会情報学コース 2015 年度卒業論文（山岸采加「バングラデシュにおける女性労働の変化とエンパワーメント——マイクロファイナンス利用者へのインタビューから——」）（指導教員・水垣源太郎准教授）を改訂したものである。